蓄えない社会

関野 吉晴

エチオピア南部に平等な社会があると聞いて、行ってみた。京都文教大学教授の松田凡さんの一五年以上にわたるフィールドで、彼がコエグという民族のところに行く時に同行を許してくれたのだ。

オモ川の下流域にイネ科の穀物ソルガムを栽培しながら暮らしている。かつてのナイル川下流域と同じように、雨季の洪水が上流から肥沃な土壌を運んでくれ、乾季の川原に種を蒔くと肥料なしで雨季の始まる前に収穫できる。

ところがどんなに頑張っても半年分しかできない。その不足分を補うために乾季に魚を捕る。乾季は池や沼の水が乾燥で水が少なくなり、手づかみで魚が獲れる場合もあるのだ。さらに小動物を狩り、ハチミツを取って雨季前のソルガムの収穫まで生き延びる。

天候不順などなければいいのだが、モノをため込むことのない彼らは不安はないのだろうか。私たちはモノをため込むことによって将来の災厄や老後に備える。モノをため始めるとどこまでため込めばいいのか、際限がなくなる。

彼らも何かあった時の安全保障を考えてないわけではない。他の人あるいは家族とのつながりを大事にしている。

私が二度目にこの村を訪れた時、初めて行った時に仲良くなったマガヤという男がヒョウタンになみなみとハチミツを入れて持ってきてくれた。ハチミツは彼らにとって森の精霊の贈り物と言われるほど貴重なものだ。私は何をお返しに渡したらいいのかと思い、松田凡さんに尋ねた。

「お返しに何をあげたらいいですかね」

すると、彼らの習慣をよく知る松田さんは言う。

「いや、放っておいていいんですよ。マガヤもお礼を貰うつもりはないですから」

日本人的感覚だとお礼をしたいのだが、次第に分かってきた。

マガヤは私とベルモという関係を作りたかったのだ。擬制の親族関係を結ぶようなもので、「今は何もいらないけど、何かあったらお互い助け合おうぜ」という関係だ。マガヤはこの村にもベルモが三人いる。また牛飼いの他民族にもベルモがいる。その他彼らは数年に一度通過儀礼がある。若者たちはその儀礼の前に家族から離れ若者宿で過ごす。そのため成人になってから、同じ年に通過儀礼を受けたものどうしは肉親と同じように緊密な関係になる。

このようにものをため込まないかわりに、他の人たちとの繋がりを強くすることによって、老後を含めて将来の不安に対する安全保障としているのだ。

プロフィール
1949年東京都生まれ。武蔵野美術大学教授。一橋大学在学中に同大探検部を創設。横浜市立大学医学部を卒業し、医師となる。1993年から10年をかけ、人類拡散の足跡を踏破する「グレートジャーニー」を敢行。2004年からは、人びとが海を渡りどのように日本へ到達したのかをたどる「新グレートジャーニー 日本列島にやって来た人々」を始め、2011年に終了。1999年に植村直己冒険賞、2000年に旅の文化賞。

月刊 みんぱく
2月号目次

1 エッセイ 千字文
蓄えない社会
関野 吉晴

特集 「夷酋列像」を読み解く
2 インタビュー「夷酋列像」の謎を追う
大塚 和義 ［聞き手］佐々木 史郎 日高 真吾
7 「夷酋列像」への多角的視点からのアプローチ
右代 啓視
8 「夷酋列像」デジタルコンテンツの制作
内田 順子
9 アイヌの衣服から見えてきたこと
吉本 忍

10 集めてみました世界の○○
あかり編
丸川 雄三

12 みんぱく Information

14 味の根っこ
ビゴス
マジェッツ アグネシカ

16 文化遺産おもてうら
見出された多様な価値
——ミクロネシアにおける世界遺産申請の過程から
河野 正治

18 音の居場所
フィリピンの街で奏でる山村の音楽
——トラヤン・マジョカヨン・アンサンブル
米野 みちよ

20 人間学のキーワード
優生学
松尾 瑞穂

21 次号予告・編集後記